

い忘却は幼き者の常、出会いを喜び合うどころか、私を見知らぬ者のようにさえ振る舞うだろう。

けれども不安や焦燥に震える時には、あるいは歓喜に駆けだす思いの時には、母の手を、あるいは誰かの腕を、かつてと同じように、探りにき

てもいいのだと、幼い日の記憶が語ってくれていたらいい。

(松戸・ひだまり文庫)

## 手当てについて

酒井 朋子

かなり昔、私がまだうら若き女子医学生であったところのお話です。医学部の授業の中で「手当て

とは何であるか？」という、一見、哲学的にもきこえる質問を受けたことがあります。もちろん



しこれはこの「手当て」はあくまでもいたわりの行為という要素が強く、そこに治そうという意図はほとんど働いていないと思います。

では、この手当ての実際の効き目はどんなものでしょうか。もし、今現在、腰、膝、おなかなど、どちらかに痛みのある部位がありましたら、是非、手を当ててみてください。効果のほどはいかがでしょうか。さすつたりすると、実際、少し痛みが軽くなる気がしたり、少し落ち着いて楽になる感じがあつたりすると思えます。気のせいでしょうといわれる方もおられるでしょうが、実際ある程度の効果はもたらされるようです。そして、この作用をある程度、医学的に説明することができます。簡易に説明すると、ひとつは痛みを感じているところに手を当てることにより、手の温かみによる直接的な

痛みを和らげる効果であり（患部を温めると痛みがやわらぐ）、もうひとつは愛情を受けているという満足感あるいは安心感からくる心の安らぎが、脳で感じる痛みの閾値を上げる効果です。

以上がそのとき授業で聞いた内容でしたが、これこそまさにハンドパワーであります。人間がいつからともなく行ってきた、なんとなくしてしまふ行為に、実際、ある種の医学的に説明できる作用があるということは当時の私にはとても新鮮な驚きでした。人間が気のせいと思っていたり、なんとなくおこなつてしまふ行為は、実際には経験的にその効果を感じているものであつたり、意外に科学的に効果の説明がついたりすることも多いのかもしれないとそのとき思いました。

動物がいわゆる「手」を持つのは、類人猿以降

のことです。手、足、という呼び方は、動物が立ち上がり歩き出してからのことで、犬や猫においては、前足後ろ足となります。歩くようになる、前足後ろ足は手と足に分かれ、足が体の支持、移動の役割を一手に引き受けるようになり、手は、ものをさわったり、器用につかんだりという役目を担っていきました。そして、人をはじめとする霊長類の手や指は、これにより外界のものと直接接触し、外界からの作用を確認するための重要な感覚器官となりました。

人間の手が行う動作の中には、手当てのほかにも握手や、手をつなぐなどの行為もあります。これらは言葉とは異なった、ひとつのコミュニケーションの方法ですが、この行為も、さわる感じることということが感覚神経や脳を介し、複雑に相互作用を及ぼした結果、友情や愛情が伝わるという不思議な現象です。

現在、ハンドパワーというと手品や魔法のようにとらえられがちですが、この種のハンドパワーはどなたも持ち備えた能力です。確かに、いわゆる「手当て」は医学的な効果とすれば、薬や点滴の足元にも及ばないのですが、私はこの授業後、この「手当て」という手段ももっと重要視してもいいのではないかと思っています。子どもが怪我をしたりおなかを壊してぐずっているとき、痛がつている部位に手を当てたり、さすってあげることで、また転び、すねをぶつけて泣き叫んだとき、「痛い痛い飛んでいけ」と手を当ててあげること、これらには、痛みや、不安な気持ちをはらぎ作用のみならず、言葉とは異なった、原始的であり根源的なコミュニケーションがある気がするのです。

(東京医科歯科大学)